

中立説を人類の基本的世界観に

塩田光喜

アジア経済研究所 新領域研究センター貧困削減・社会開発研究グループ主任研究員

文化人類学者・塩田光喜さんのフィールドはパプアニューギニア高地。そこに住むインボング族とキリスト教ミッションとの接触を分析した近著『石斧と十字架』で、文明化とは何か、文明との接触で人間の精神はどう変わるのかを考察した。一方、塩田さんは、中立説をワトソン-クリックによる二重らせんの発見に並ぶ20世紀生物学最大の成果と評価する。物理学を専攻するはずだった青年が文化人類学に足を踏み入れて30年。齋藤教授とは学生時代から熱い議論をたたく間柄だ。



齋藤 なぜ中立説を二重らせんの発見に並ぶ成果と評価するの？

塩田 ダーウィンの進化イメージと中立説の進化イメージはすごく違う。ヒトのDNAの95%はジャンクで、わずか5%が意味のある遺伝子というところが大変おもしろい。人文・社会科学に対応させると、19世紀から20世紀前半までの機能主義と20世紀後半の構造主義のパラダイムチェンジに対応する気がする。

齋藤 レヴィ＝ストロースが言い出した構造主義と中立説の考え方にアナロジーがある？

塩田 構造は外界との関係によって規定されるものではない。中立説と考え方が似ているでしょう？遺伝子が構造を決め、これによって生物が規定されているという意味で、中立説とアナロジーがあるのではないだろうか。

齋藤 構造主義には明確な論理構造がある。

塩田 レヴィ＝ストロースは構造が働いている部分についてしか語らないが、彼のメインテーマは神話だ。社会においては無駄な神話が山のようにある。そのなかから互いに変換可能な神話を選び取って分析している。

齋藤 それが物語であり歴史。生物進化と似ているね。中立説で非常に重要なのは突然変異だ。突然変異が大事だと最初に言い出したのはド・フリース。ちょっと中立説に似ている。これは機能よりも歴史性を重要視する考え方につながる。

塩田 生物はそんなに機能一辺倒にはできていないところがおもしろい。

齋藤 従来、かなりの数の分子生物学者

は機能主義だったのではないかしら。タンパク質の相互作用に機能の論理を求めているのが主流で、物語には関心が無い。

塩田 世界観の問題だね。

齋藤 もし世界がダーウィン流の自然淘汰で進むのなら、とっくに最適化されているはず。世界の構造をつくるには物語が大切だ。木村先生も言っているが、遺伝子重複のように素材が偶然に突然変異ででき、そして一挙に世界ができる。

塩田 それは文化人類学という構造変化だね。

齋藤 古生物学者のグールドは、生物の形の進化には中立進化があると認めた論文を書いている。たとえばヒトの指はなぜ5本かと発生生物学者に尋ねられても、説明するのが難しい。脊椎動物の祖先がたまたま5本の指を持っていた。ボディプランがいったん決まると変更はなかなか起こらない。退化はあるが、7本や8本にはならない。これは機能主義では説明できない。受精卵からの発生のカスケードに拘束されるのだと思う。中立説を認める古生物学者はいるんです。人文・社会科学や構造主義では偶然的な要素をどうとらえるのだろうか。偶然が大切だという思潮があるだろうか。

塩田 明示的にはないと思う。マックス・ウェーバーを除けばね。例えば西欧中世史のアナル派は個人のイニシアチブよりメンタリティーの流れを押さえようとする。ちょっとマルクス主義の必然に近いものがある。歴史記述を重視し、歴史にある種の連続性を想定するので、突然変異のような意味での偶然とは一線を画すものだ。

齋藤 ダーウィンの進化論で大切なのは自然淘汰だが、人間が自分の好みや考えに基づいて手を加えて動物を変化させることができるなら、自然もそのとおりだという発想があるように思う。白いマウスは可愛いからといって増やすとしたら、人間が神の役割をしていることになる。自然淘汰も実は神の目で見ているのではないか。その意味でダーウィンはもう一皮むける必要があったと思う。

塩田 むしろダーウィンは機能主義的な自然観だから受け入れられているのではないの？

齋藤 産業革命という背景もあった。

塩田 そう。リンネが分類学をつかったあと、そこにストーリーをつけたのがダーウィン。中立説は二重らせんにストーリーをつける試みだったのではないだろうか。

齋藤 なるほど。時期的には確かに合致する。ダーウィンは神を殺した。19～20世紀の変わり目の思想家ニーチェに通じるところがある。

塩田 思想史的にはフォイエールバッハからマルクスへ、さらにニーチェへという流れがあり、フロイトで最終的に神は死んだ。哲学でこの流れを継承したのがハイデガーなどの実存哲学だ。神なき世界のあり方をつくっていく。構造主義はこの実存主義を否定することで世に出た。

私は生物学ではジャック・モノーが構造主義者だと思う。

齋藤 モノーには『偶然と必然』という著書があるが、タイトルに偶然とつく著書を出したきわめてまれな分子生物学者だ。

塩田 構造主義の先はポストモダンで、ガタリ、フーコー、デリダが登場するが、デリダの死でポストモダンは終焉した。その後1990年代以降は思想的には迷走し

ている。

齋藤 ニーチェは偉大だが、ニヒリズムを持ち出すと何もすべがなくなる。

塩田 ログスだけで進むと宇宙の熱的死と同じように思想の熱的死に立ち至るだけだ。ところが人間にはログスだけでなくミュトス（神話素）がある。これがある限り、人間は物語を紡ぎだしていく。

齋藤 僕たちは中立説を乗り越えていか

なくてはならないと思っているが、そのキーワードは偶然とニヒリズムと世界観。新しい歴史学派を構築したい。

塩田 それではじめて中立説が人類の基本的な世界観になるだろうね。ポスト二重らせんの新たなナチュラルヒストリーを！

(2008年10月収録 構成 古郡悦子)

本特集に登場したり特集の内容に深く関係した人たち

